

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

Black

繪本梅志水菫

六

13
1803
6



梅花春水叙

唐山の景好朝光景母子更よもいし近世
 稗官者流の字も其冠するも其山東は
 おく母を其の昔より母志を以て大なる喜を
 京傳其名といふ所者あく小幡小波が安積沼
 花のほと且見よ人の路男あく指事表に雷怒
 そは右よりる者もゆめとある善玉悪玉家味と

はや〜或は逢夢石の腹筋とよ〜と新い生涯は
巻首と結ぎ〜著述牛の行〜棟は元新大山
小説百有全部悉く投筆と爲は運河らばと
その中よ李園に雜劇と翻案と梅の由は傍
物語と前編既よ世は行をと爲事久〜心は
どもいまだ後編に結局よいま〜と新を懸ひ
書房ゆ某先生ふとけ著述と催促せ〜この

竟の稿とたけ強〜はもら黄泉の客とけも
結〜りまより〜書肆今年其次編と予おらふ
予曰醒齋先生に新音出案以の〜おらふ及〜列
形〜い母哉〜錦の破〜と襪襪も〜補〜る
4異〜と〜と志〜と理〜と同様〜と〜は〜躰履よ
は〜と〜千里と往〜例も〜と〜の高〜は〜
〜して〜も〜は〜足下の不憶〜と〜

軍もあつていふも独り筆を採るまひ福を
とまはさすいふも先もせしむる覺束あつても
筆と深まじふるの原来活業痛書と後目
市中とのけりる夜、通霄札に向つて尚俗用の
漢あれは十月九と校訂も門生さる譯亭
も唯亦あつて没やも渠も從來酔為懶去
は事あつても吞代保しき筆とれど意駟人

独ひ出づ摺ひあつて十月廿日も著述二向摺
揚げ先づいふも吞代保しき筆とれど意駟人
さつも覺束の如くは隈雜棄漏さきも同ぐ
き役者もあつて受もあつてもあつても校去二入
よせうも山東が丘も足らぬ瘦腕で急い
るやれと昔編と後帙四冊も継巻の梅と枝
色ももあつては独り筆とれど意駟人

小引ひねの女房にようぼう小梅こめい亦また愚索ぐさくに筆ふでに世よ只ただ吉きちの
 狂訓きやうくん亭ていに聽き下くだふおのそ
 吉きち評判へうはんを尋もとふは我われ

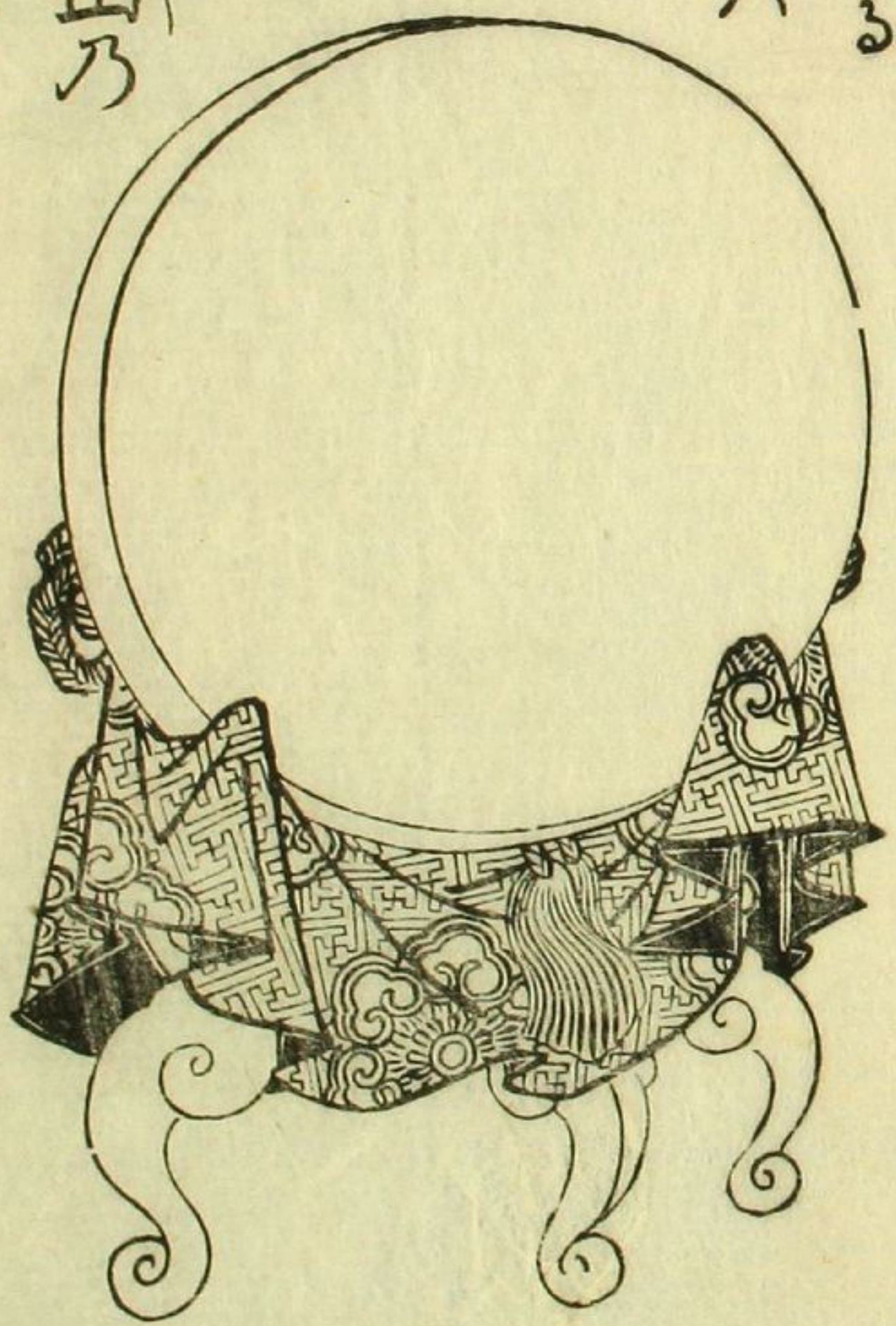
文政九戌歳初春

狂訓亭に聽下ふおのそ

南仙笑楚満人戲題

重寶 冰姿鏡

善ぜんとありて寶たからとす
 古人こじんの格言くわげんありて
 似にて亦また其德そのとくを
 備そなへる重器ちゆうき乃すなはち
 類たぐひ世よに少すくく
 本朝ほんてうの
 三種さんしゆに神器しんき唐山たうざん乃すなはち
 傳国でんこくの玉璽ぎよき共ともに
 国家こくかの重寶ちゆうぼうなり









縮商人
矢三郎



悪漢
鬼平治

與四兵衛
小梅

梅鉢與四兵衛が苦心にて
求められたる巻中
第一の品

後宇多院の御宇

建治年間無雙乃名刀

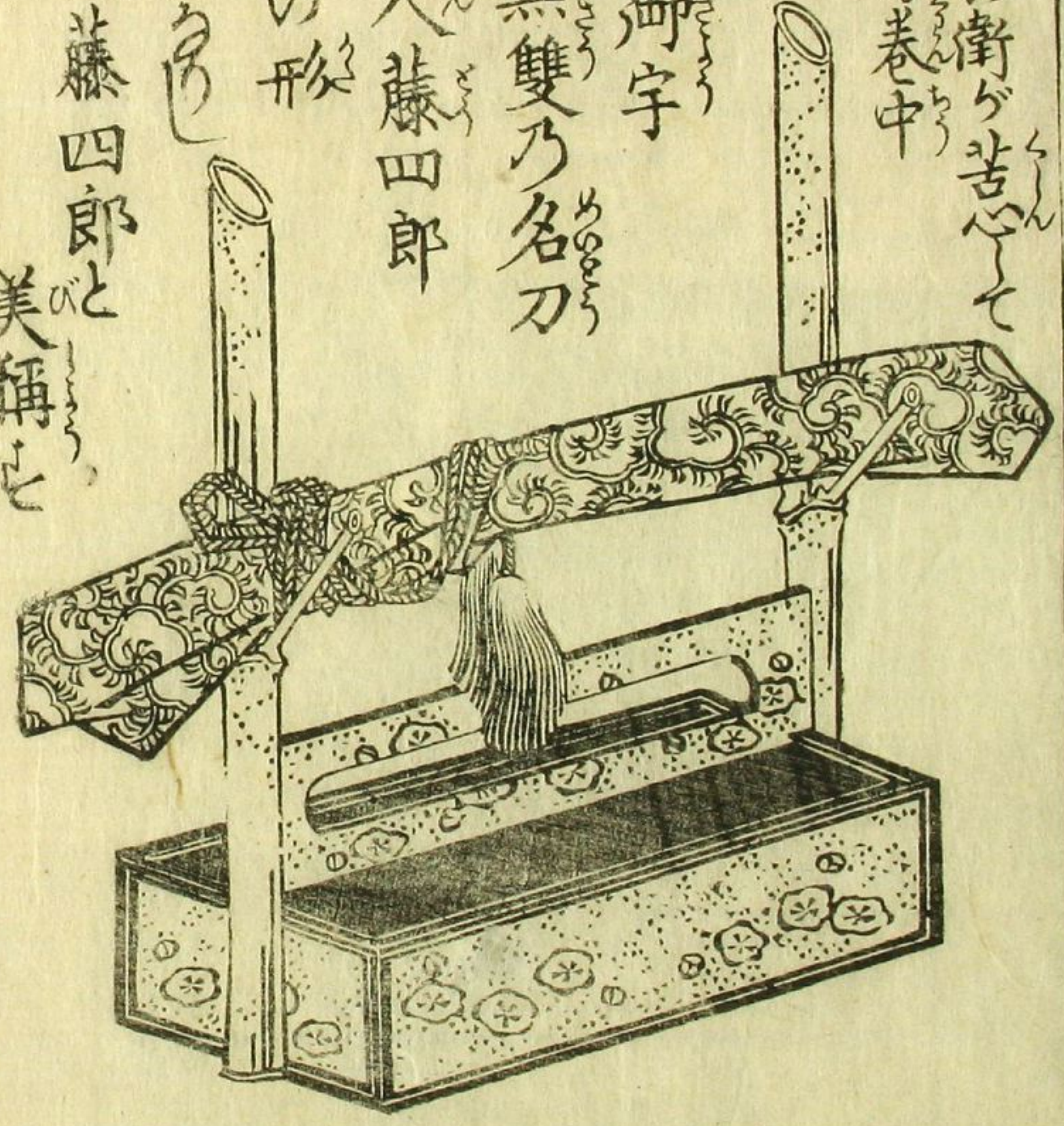
栗田口の住人藤四郎

吉光鑄作の形

この切りの色

の久世に鑄藤四郎と

美稱と



梅之與四兵衛
物語 後編
梅花春水卷之一



東都

南仙笑楚滿人編述

第十一回

避雨會怨人

楚書曰楚國ありて室とまるとも一唯善はく室とすとて傳國は
王璽あり吾日本も三種神宝千早振る神代より傳へて今も尊ぶ
故に天子將軍より諸侯大夫の家よりあるは皆家傳たる重宝なり
きりあらず去程は與四兵衛ハ鑄藤四郎の刀を買い求めしに研ぎ佐
助の懸ひより贖物と小梅は渡せし六子四兵衛ハ一日目見しより大
きく教るに佐助を引捕へ詮美せしやと急ぎ石濱なる佐助の家へ
至るとんりに留守とちがく戸ぎて有るは詮術よく立返らんと

徳を賞じ徳を居間の柱より奪ふに思ふやき夜よりして
 藻の枝木が然美ふつにまぐさりけまが借とて我らも遠は
 這境の古物よしてかゝる徳ありと賞へたりと致がゆりのめりし
 太郎より多くの合衆をつつてける。理のつるは這境の山車自初
 公唐琴鹿次郎へ下し賜とて氷姿境のまがりの形て管文太の
 久々山塞あることか。安の片島の深山のまがりの不自由の
 多く明ても暮ても。松風と鹿は音獣の吼る夢のまがりのま
 きりに響花のあつらうく。山塞とが部下のうちある名ある盗
 ども数人まあづけ。まがりの穴太郎以下山賊七八人と俱そ
 武藏の国へ下り。ことと爰は逗留して武士の退糧の如くお扮部下

とも皆悉く家来とよび日毎は近在を徘徊し豪家の家ばかりのみ
 亦美面う死女と匂引して遠国へ賣渡しると千般の悪行を振る
 ける。或日法華の辺りより所用をく只獨り偏笠涼くおつた
 黄昏よむびと待乳山の林をよびたる頃も俄は一天墨を流
 せしとて急雨盆を傾るやうふと雷鳴りたをこめ死忍尺の間まへ
 けり。闇夜は更なるぬも侍は樹木生茂りたるまぐさりて
 暫し雨と避く居るふ又りや雷きびしくなる音は通のかりし
 一箇の男慍ふこめ死管文太が居る邊りへ込入るとこも雨を
 かきひらうち急がびいと袂ごとく村雨のあつたりをまはせど
 早日全く暮とて如は夜のことこもは強方るく互はすつらあが

めく。つがるを執るは管文太より嚮ふも木下蔭は雨を達し
 者あり三箇ハ路ちと惚と息どしきさてもおひびきしは雷も
 きて雨を達ハ衣板を濡し一ハあまのぬらぬらなり。りごる今の太
 雨は濡もささぎ。たゞ濡葉のてく帯も羽織も絞るたさり
 ろあつとりしよ。ささぎがさしらぬあまの落葉枯枝の類ひあづ
 志あると氣のあつた一ハ火をたのめさるが幸ひ我儀は拙火おのほ
 るるは焚火して各衣板を乾んぬりつあつりあは二箇ハむとま
 さごのよの落葉枯枝おとあつむるひまに一箇ハ火お袋の中より火
 道具とりいご。りさる乾る枝入り付んとすまど指の糸は焚
 付がこそ俯くあつて枯葉へ火うつりすと見んとさる。一度は火

五火執二箇ハ信と頼れ合「マア汝ハ誓屋の佐助のつすやぞよ
 とおつと與四葉の南無三宝と逆知のさつと捕へて動は下よ
 も最前女とあると雁物渡せ横屋のの實の橋藤四郎の
 さらちり渡せ」と敷圍もろく豊正ハ佐助ハ変て冷然ひひ
 ちも先刻見ごてあつた何ても似つぬ志赤る物小梅り使公
 さのたのと誓まつすを真の火の爰まきつと持しつと渡り手
 四葉夫人の怒りそのしよて
 燃立枯枝さらしと燃はハ忽きくまの周佐助ハ圍を幸ひハ逆
 んとまきと子四葉のからトといひ体正を管文太へんくひ
 息さるりつとく佐助ハ腰に帯せハ枝るを佐助ハからし



新撰 浮世草子 卷之一

争へど左衣の腰の子四三勝と引組んで居るとまじが詮術の死間
 袋丈太ハ獨り笑て刀をさす物をもいひしが押裁き足早よこと
 走せ去りしける必ぬ猶も子四三勝佐助組つころんつゆのあひ
 佐助ハこそもうみいどと透せと見合せ逃れまど何国までと選りけ
 るが来聞取といひ道まどつて走りぐさうちよ佐助ハ後
 びして逃延びけまが竟も子四三勝も選りまどあひらびきま
 んえひけるまど詮方まきまじくと其数ハ病へりり山梅もま
 のうと結山齒がみまどつて怒りけまどまど死せまきまどと
 佐助が来まど詮まどけまどめまや何国へりりやまま
 口せまどけまど毎念まどらその怪まどお捨おたぬとまの宿
 あり

袋丈太ハ不慮鎬藤四郎の刀吾まに灰とてを執りし詮術の死間
 家をまつらひ性を深んとあまめ名を困心と替へ西国の去る緒
 候よ仕へし身まど練言の入まざるまど致仕退糧一當国へま
 志と披露一部下の山城を門人と偽りて秘術の指南と業とす
 世をまじしきまど盗賊まどまどらたけるは頂まどり程遠まどぬ
 意が産とりり所まど形をまどぐ一妓院あまこありて其娘ハ信仲が
 女闘士百の古ふもまどくおまどまどあまもあまも警備のまどら
 まど浦屋とまどまど一階棟高く家もいと度母まど許まど
 抱へ夜毎日毎まど迷る客ハ淡の真砂のよむまど尽ぬが
 まど浦屋の揺揺樹とありてまどまど驚情まど小はまどあり
 あり

尾をいどふもまきりて容員の風流たるのまのすすむゆき
○まきりて ○容員 ○風流 ○たる ○の ○まの ○すすむ ○ゆき
老く萬の桂葉は秀しく六渠が并は通ふ客人の一月二月次第より揚
○老く ○萬の ○桂葉 ○は ○秀しく ○六渠 ○が ○并は ○通ふ ○客人 ○の ○一月 ○二月 ○次第 ○より ○揚
をと頼み言ひ入ると山後漸く逢ふのり這山はあがしをさるるふ
○を ○と ○頼み ○言ひ ○入ると ○山後 ○漸く ○逢ふ ○の ○り ○這山 ○は ○あがし ○を ○さるる ○ふ
當国萬飾の里は流き清と嘆ぶ者あり今戸焼とる嘆る土人形感
○當国 ○萬飾 ○の ○里 ○は ○流き ○清と ○嘆ぶ ○者 ○あり ○今 ○戸 ○焼と ○る ○嘆る ○土人 ○形 ○感
童が再びの答物ることを能くして自らことごとく荷へて荷ひ賣
○童 ○が ○再び ○の ○答物 ○る ○こと ○を ○能く ○して ○自ら ○こと ○ごとく ○荷へ ○て ○荷ひ ○賣
ありきしがは傾けうる物へ東のうこめては最務らるるのけはるる
○あり ○き ○し ○が ○は ○傾け ○うる ○物へ ○東 ○の ○う ○こ ○めて ○は ○最 ○務 ○ら ○る ○る ○の ○け ○は ○る ○る
人多くありて恩にすいぬ千の残さゆひぬ妻の世をよやく一男女
○人 ○多 ○く ○あり ○て ○恩 ○に ○す ○い ○ぬ ○千 ○の ○残 ○さ ○ゆ ○ひ ○ぬ ○妻 ○の ○世 ○を ○よ ○やく ○一 ○男 ○女
二箇の子あり足は種々ともひ妹をゆ教里といひ妹は元来捨子は
○二 ○箇 ○の ○子 ○あり ○足 ○は ○種 ○々 ○と ○も ○ひ ○妹 ○を ○ゆ ○教 ○里 ○と ○い ○ひ ○妹 ○は ○元 ○来 ○捨 ○子 ○は
てありくは何卒縁の人にもね来より一借とそをよすも是れ
○て ○あり ○く ○は ○何 ○卒 ○縁 ○の ○人 ○に ○も ○ね ○来 ○より ○一 ○借 ○と ○そ ○を ○よ ○す ○も ○是 ○れ
よふゆきまのけりかこ成長よあまびこ袖衣の小織の業をほひ
○よ ○ふ ○ゆ ○き ○ま ○の ○け ○り ○か ○こ ○成 ○長 ○よ ○あ ○ま ○び ○こ ○袖 ○衣 ○の ○小 ○織 ○の ○業 ○を ○ほ ○ひ

